

在日朝鮮人が「4・3」を語るということ：
済州島にルーツを持つ在日朝鮮人二世知識人を中心
として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学人権問題研究会 公開日: 2017-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄭, 栄鎮 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171221-002

在日朝鮮人が「4・3」を語るということ — 済州島にルーツを持つ在日朝鮮人二世知識人を 中心として —

鄭 栄 鎮*

1. はじめに

朝鮮半島最南端に位置する韓国済州島¹⁾と日本との関係は近い。永野は統計などをもとにして、日本国籍取得者を含めて、済州島人口の約27%に該当する15万人程度の済州島出身者が日本に居住するとしている〔永野 2010〕。

古くをみれば、日本の植民地統治下の1923年に開設された済州島・大阪間を結ぶ定期航路の開設が済州島民の日本への移動の一因となっている。1930年時では島民人口の5分の1が日本在留であり、しかも生産年齢人口がその中心であったとされる〔杉原 1998: 85〕。このような、植民地期に日本に渡ってきた済州島民やその子孫などが、現在の日本に居住する済州島出身者の中核を占めているのは明らかであろう。

しかし、他方では、植民地支配解放後も多数の島民が日本に移動した時期があるという。1948年の「4・3」である²⁾。「4・3」を簡潔に言えば、「1948年4月3日の済州島での武装蜂起に端を発し、その武力鎮圧の過程で3万人近くの島民が犠牲となった事件」である〔文京洙 2010a〕。

この「事件」は1948年の発生以前よりさまざまな伏線があったとされ、これにより多数の島民が日本へと逃れ、「済州出身の在日同胞のうち、1947年に日本に渡ったものがもっとも多い事実」があるという³⁾〔『済民日報』四・三取材班 1994:

301〕。

「4・3」は1980年代まで韓国でタブー視されてきたが、近年では国家権力の責任が認められ、真相究明が続けられているとされる。その過程には民間レベルでのさまざまな運動があり、それらの運動が活発化される以前には、済州島を故郷にもつ心ある在日朝鮮人知識人が日本で「4・3」を執拗に問い続けたともいう〔文京洙 2010b〕。つまり、「4・3」の真相究明と国家責任の認定には、済州島を故郷にもつ在日朝鮮人知識人の貢献もあったということである。

文京洙は、先のとおり「4・3」について、在日朝鮮人知識人が「執拗に問い続けた」という。しかし、知識人のみならず、「4・3」を問うためには、まずは「4・3」とは何かを語り、明確にしたうえで、他者が理解できるように言語化する作業がともなう。そこに必要なのは、多数の人びとの「4・3」の記憶である。

一方、「記憶」が言語化される過程では、言語化する者によって継承される「記憶」と継承されない「記憶」が選択されている可能性が生じる。そのように考えると、現在、日本において流通する「4・3」の記憶と物語は、在日朝鮮人知識人がエピソードの取捨選択により再構成したものだといえる。ならば、在日朝鮮人知識人による「4・3」のテキストをみれば、「4・3」の「記憶」がいかにかに再構成され、継承されているかを

探ることが可能になる。

このような問題意識をもとに、本論では、現在、日本で在日朝鮮人知識人によって語られる「4・3」の記憶と物語がいかに再構成され、継承されているかを検討したい。そして、再構成された物語としての「4・3」を、知識人のみならずそれ以外の在日朝鮮人⁴⁾もが継承する行為の意味を考察したい。

先に結論を述べれば、在日朝鮮人、しかも韓国語を解さない者が、このような再構成された済州島という自己に連なる「故郷」の物語を継承し、受容するのは、「故郷」を保有したいという欲望のあらわれである。

日本で生まれ育った在日朝鮮人にとって、「4・3」が「故郷」のできごとであったとしても、一方では、生活上の拠点を持たない「外国」で起きたできごとである。「4・3」は在日朝鮮人にとって過去のできごとであり、追体験のできごとともいえる。にもかかわらず、その記憶と物語を自己に連なるものとして継承するのは、失われた「故郷」を保有したいという欲望のほかならない。

以上からは、「4・3」の物語と継承を考察するには、ことを実際に経験した者よりも、記憶を再構成し、継承する立場にある「4・3」以降に出生した在日朝鮮人二世以降をみるのがより適切である。

本論が主に用いるのは文京洙である。文京洙は済州島出身の父母を持つ東京生まれの在日朝鮮人二世である。『済州島現代史』『済州島四・三事件』など、済州島と「4・3」にかかる作品を発表しており、まさしく、本人の言葉でいう「4・3」を「執拗に問いつづけた(略)済州島を故郷にもつ在日の心ある知識人」[文京洙 2010]の一人である。また、大学教員という立場も「知識人」

とみなされる存在であり、本論の問題意識からもふさわしい。

本論の構成である。まず、「4・3」の多様な評価と、ついで、在日朝鮮人知識人が描いた「4・3」とその後世への影響にふれる。その後、文京洙のテキストから、「4・3」の「記憶」と「物語」がいかに再構成されているかをみる。そして、これらを通じて、在日朝鮮人が「物語」を継承する意味—「故郷」を保有する欲望—を考察していく。

2. さまざまな「4・3」

ひとつのものごとは人によって様々な姿をみせる。もしくは、様々な解釈できるともいえるが、「4・3」についてもさまざまな評価と「物語」がみられる。

これを辞典類でみると、2000年改訂発行の『朝鮮を知る事典』では、「南朝鮮単独選挙に反対して、1948年4月3日蜂起した済州島人民の武装闘争」という記述に端的にあらわれるように、人民蜂起という側面から描かれているのがわかる[伊藤、大村ほか 2000: 155]。

他方、2002年発行の『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』では、「1948年4月3日の済州島での武装蜂起に端を発し、その武力鎮圧の過程で3万人を超える島民が犠牲となった事件」となり、島民の犠牲的側面があらわれている[和田、石坂 2002: 155-156]。

さらに、2010年発行の『在日コリアン辞典』は、「1948年4月3日の済州島での武装蜂起に端を発し、その武力鎮圧の過程で3万人近くの島民が犠牲となった悲劇で、在日社会にもさまざまな影をおとした」とあり、島民の犠牲的側面だけでなく、「在日社会」にもふれられている[国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委

員会 2010: 271-272]。

「4・3」の要因と背景について、『朝鮮を知る事典』ではふれられていない。他方、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』では、「蜂起は直接的には、当時米軍政が推進した5・10総選挙に反対して決行されたものだが、前年から深刻化していた米軍政と左派勢力との対立、米軍政によって投入された本土との警察や西北青年会の島民への横暴がその引きがねともなった」とあり、『在日コリアン辞典』にも同様の記述がみられる（「西北青年会」については後述）。

『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』と『在日コリアン辞典』は同一の執筆者（文京洙）であり、内容も類似しているが、『朝鮮を知る事典』（内海愛子）は大きく異なる。同じ「4・3」というできごとであるが、執筆者、執筆時期などにより異なる記述となっているのがわかる⁵⁾。

ついで、文京洙の指摘にある、「済州島を故郷にもつ在日の心ある知識人」[文京洙 2010]による「4・3」であるが、この指摘にあてはまる人物として金石範があげられる。

金石範は、1950年代後半より現代に至るまで、『乳房のない女』『鴉の死』『火山島』などの「4・3」をモチーフにした作品群を発表してきた作家である。しかし、本人が認めるように、その「4・3」を扱った作品はすべて創作、フィクションである。金石範は、「資料を集めたくっても資料がないんですよ（略）だからほんとうにね、よくあの時分にねえ、行きもしないでよく書いたと思いますよ」[金石範 2010: 110-111] というように、「4・3」を実体験していない。

「しかたないけども、やはり私は見物人ですよ、部外者なんです。それはしかたないことだと思います。現場で体験しなくても欠かざるをえないから『鴉の死』などを書いたわけで……（略）」

現実として起こっている。その現場にいなかった欠落感、そのとき、そこにいなかったというのが私には大きいですね。もともと済州島にいなかったというところから小説を書き始めたということがあるのです」[金石範 2010: 48-49] として、金石範は済州島での「4・3」の未体験を認め、他方では、「四・三事件に出会わなかったとしたら、どういうものを書いてくれればよかったのか、解らない気がしますね」[金石範 2010: 118] としていることをみれば、その創作の原動力はまぎれもなく「4・3」である。

1960年代には、金奉鉉・金民柱の『済州島人民の四・三武装闘争史』が出版されている。これは、「蜂起の「冒険主義的」性格は免れないとしながらも、その究極の目的が反米救国、つまり民族解放と祖国統一にあった」[文京洙 2001: 225] という内容であり、1980年代に韓国社会に台頭する運動圏のなかでバイブル的に読み継がれたという [文京洙 2008: 207]。

「私たちが在日の二世が四・三事件を知り、これをイメージしえたのはこれらの著作を通じてであった」[文京洙 2008: 207] と文京洙は指摘しており、「4・3」の継承に在日朝鮮人知識人が果たした役割はきわめて大きかったといえる。

しかしながら、在日朝鮮人の二世以降がイメージした「4・3」とは、金石範の作品群でわかるとおり、フィクションである。また、先の辞典類では、その執筆者、執筆時期により記述が大きく異なっていた。つまり、知識人が解釈し、再構成した「4・3」がそれぞれに流通しているのであり、このような「物語」としての「4・3」が次代の在日朝鮮人の「4・3」認知の基盤になったのである⁶⁾。

3. 済州島の「独自性」と「共同性」

ここからは文京洙の「4・3」にフォーカスしていく。金石範が実際に「4・3」を経験していないとはいえ、「4・3」の発生時と、タブー視された時代から国家責任が認められるまでを生き、その体験談などをモチーフにして創作したのに対し、文京洙はそうではない。したがって、金石範の作品と比較すれば、文京洙の「4・3」はそれ以上に「物語」だといえる。

文京洙には済州島、「4・3」を主に扱った2作品がある。これらは学術論文に比較して入手しやすく、一般的に流通していることから、本論では上記『済州島現代史 公共圏の死滅と再生』と『済州島四・三事件―「島（タムナ）のくに」の死と再生の物語』を主に読んでいく。

まず、済州島の歴史である。文京洙は、済州島には李朝末期にはじまる民衆運動の強力な伝統、中央政府や外国への抵抗の歴史があるという。そして、そのような抵抗の歴史が済州島の独自性だとしており、朝鮮半島の他地域との違いを強調している [文京洙 2005: 31–32]。

また、「人々のなかに経済の余剰をめぐって対抗し合う関係が大きくは成立せず、村単位の共同体的な生活関係が保たれ」 [文京洙 2005: 33] といい、村と島の共同性をも強調している。

さらには、済州島の個別の村単位を超えた島民の自治的な討議や意思形成の枠組みとして「民会」があり、これを根拠として島民が自治的志向を有していたともいい、ここからも済州島の独自性、共同性を強調しているのがわかる [文京洙 2008: 32]。

済州島は12世紀に高麗に併合されるまでは独立国であり、独自の文化、風習を保っていたとされ、「朝鮮王朝500年の儒教支配にもかかわらず、島民たちは昔ながらの信仰や習俗、言葉を

かたくなにまもってきた」 [文京洙 2008: 30] ともいう。このような歴史と独自とされる習俗等は、文京洙のみならず、それ以外の者が済州島を語る際にも繰り返され、独自性を主張する根拠となる⁷⁾。さらには、済州島がかつて独立国だったという歴史もが済州島の独自性と異質性を強調する根拠にもなる。

しかしながら、朝鮮半島の外国への抵抗を考えれば、たとえば、もっとも知られている「3・1 独立運動」があるように、けっして済州島の独自性ではないと思われる。

また、19世紀に起きた全羅道での農民反乱「甲午農民戦争（東学党の乱ともいう）」もあり、中央政府への反乱もけっして済州島だけにみられるものではない。

文京洙が強調する済州島の独自性と共同性は、一方の済州島以外、朝鮮半島上の各地域との比較で述べられてはいない。したがって、済州島の独自性が強調されるほどに、各地域に存在すると思われる地域性、独自性は無視され、一律な同質化と済州島の異質化が読者に促される。済州島の独自性が強調されるにしたがい、済州島と他地域との境界線が画定されるのである。済州島の独自性と異質性が「4・3」発生の要因の一つと解釈可能になり、独自性と異質性がなければ「4・3」は発生しなかったとも解釈できる。

いずれにしろ、済州島の独自性を幾度も強調することで、結果として済州島の異質性を際立たせる効果をもたらしているのは明らかである。

4. 「4・3」に至るまでの済州島

ついで、「4・3」に至るまでの記述である。文京洙は「4・3の悲劇は、朝鮮半島の分断の問題と分かちがたく結びついている」 [文京洙 2008: 53] として、まずは解放後の朝鮮半島の信

託統治⁸⁾の問題からは始めている。

ついで、済州島の建国準備委員会⁹⁾(建準)と人民委員会が「基本的には、行政区画上は上位の全羅南道のそれとは別に、いわば下からの積み上げ方式によって成立した、という見方が有力であり、その意味で名実ともに島の自治組織として出発していた」[文京洙 2008: 68]という。済州島の人民委員会が島の自治組織としていわば民主的に発足したとして、これを全羅南道と比較することで済州島の独自性を担保している。

また、済州島の人民委員会は脱イデオロギーがおおむね保たれ「穏健な政策」をとり、住民の多様な要求に応え幅の広さを示すとともに、昔ながらの村社会の共同性に深く根ざしていたともしている[文京洙 2008: 71-72]。以上をみれば、文京洙が済州島の建準、人民委員会とその統治に肯定的評価をあたえているのはたしかである。ここでも済州島の独自性が強調され、かつ、済州島社会の共同性を肯定的に描いている。しかし、文京洙はそのいうところの「共同性」の定義を行っていない。これについては後述したい。

あらためて考えると、村落の共同性とは文化風習やルールとの共有によって成立するのであり、これらを共有できない者を排除することでもある。共同性と排除性は表裏一体の関係であり、共同性を強調するほどに、他方ではそこから排除された者の存在を無視することになる。したがって、済州島の共同性を強調することは、一方の排除性を隠蔽することでもある。

済州島および「4・3」での排除性を考えるに、「北朝鮮での社会改革を嫌って南朝鮮に渡ったいわゆる越南青年によって組織された反共右翼団体」[文京洙 2008: 89]とされる西北青年会をみたい。

西北青年会は、「四・三事件に至る災いの種として済州社会に居座ること」になったという[文京洙 2008: 90]。それらが引き起こす暴力事件、婦女暴行等は日常化するほどであり、傍若無人ぶりがみられたと、「4・3」当時、済州島にいた金時鐘は述べている[金石範・金時鐘 2001: 76-77]。

しかし、けっして西北青年会を擁護しないが、これらの青年たちが「越南青年」として済州島に渡航した経緯をふまえれば、西北青年会とは済州島に根ざした存在ではなく、済州島コミュニティの「共同性」から排除された存在だったと考えられるのではなかろうか。したがって、済州島コミュニティの共同性を強調するほどに西北青年会の横暴もが強調されることになるが、実のところ、これらは表裏一体の関係である。

金時鐘は、西北青年会を構成する青年がみずからの故郷の共同性から脱落せざるをえなかったと、以下のように述べている。

ぼくの家が北出身だからか、西北会の若い青年たちがその日暮らしが出来なくてよく家に来てたんですよ。で、その話を聞くのよ。なぜ北を離れてきたかということを含め(略)20代の若者が多かったけど、聞くと切実なものもあるのです。親をほったらかして来て、今親の行方がわからないとか、離れてはきたがやはり帰りたいという話を聞くと(略)あやまって米軍政のお先棒を担ぐ暴力団のような奴らだと思っていたけど、個別的に会うと悲哀もあるし、流離、故郷を離れた者のかげりもあるわけよね、個別的には。(略)西北会を、ぼくは、呪詛、呪いみたいに思っていますけど、個別的に知っている若い何人かの思い出を考えると、

悲哀、憂いもただよってくるのよ [金石範・金時鐘 2001: 79]

文京洙は、西北青年会とならんで右翼団体の「大同青年団（大青）」の存在もが、「4・3」を語るには欠かせないという。しかし、「西青の非道振りが島民たちに悪夢のように記憶されているのに対し、大青についてあれほど際立って語られないのは、彼らのほとんどが地元出身であったことにもよるであろう」ともいう [文京洙 2008: 91]。

西北青年会、大同青年会とも、同様の残虐行為を繰り返したと文京洙は指摘しているが、にもかかわらず、済州島出身の大同青年会は済州島コミュニティの共同性に包摂されることで隠蔽され、記憶から抹消されつつある。

それに対し、西北青年会は済州島コミュニティに根付いた存在ではなく、済州島コミュニティの共同性から排除された存在であったがゆえに、その残虐行為の記憶が強化されると同時に、新たな「物語」がつくられた可能性も否定できない。

以上をみても、共同性と排除性は表裏一体の関係である。済州島コミュニティの共同性を強調するほどに、一方の排除性は「記憶」と「物語」から隠蔽されていくのである。

5. 島民の視点からの「4・3」

「4・3」には、人民側のいわゆる「武装隊」による犠牲者と、施政側のいわゆる「討伐隊」による犠牲者の双方が存在する。2003年までに申告された討伐隊による犠牲者は1万955人、武装隊による犠牲者は1,764人、その他などとなる [文京洙 2008: 137]。討伐隊による犠牲者が多いのは明らかだが、一方の武装隊によるそれも皆無ではない¹⁰⁾。

「4・3」は討伐隊による犠牲者が多く、犠牲者数が増大であるゆえに、その犠牲が描かれる量が増加するのも当然であろう。文京洙のみならず、「4・3」の「物語」は討伐隊による暴力行為に比重がおかれて描かれており、犠牲者数の多さからみれば必然でもある。

だが、一方では、武装隊による犠牲者が存在するのもしかである。文京洙は、「四・三事件の犠牲者は極めて複合的であり、それぞれが置かれた立場によって、一つの歴史的事件がまったく異なるものとして、生き残ったものたちの記憶に刻まれ」たことから、「4・3」の評価は多義的で複雑なものになったと指摘している [文京洙 2008: 138]。

同時に、文京洙は武装隊の蜂起に至る経緯について、当事者の証言をふまえつつ武装隊の拙速さを描き、批判を行っている [文京洙 2008: 98]。しかし、一方では、蜂起が「分断阻止という大義を掲げながらも、追い詰められた左翼の自衛的かつ限定的な反抗・報復としての性格を帯びていたし、村社会を基盤に強い絆で結ばれていた島民たちの多くも、そういう感情を共有していた」ともしている [文京洙 2008: 105]。

武装隊への批判を展開する一方では蜂起をやむをえない行為だとしており、武装隊の視点から蜂起を描いているのは明らかであろう。さらには、島民が「強い絆で結ばれていた」として済州島コミュニティの共同性にふれると同時に、武装隊を島民と同一視している。つまり、「4・3」の評価が多義的で複雑であったとしているものの、文京洙が「4・3」の「物語」を武装隊と島民を同一視し、かつ、島民の視点から描いているのは明らかである。

さらにいえば、「4・3」の「物語」の枠組みを、済州島コミュニティの共同性と、共同性にそぐ

わない者たちの対立として構成しているとも読める。ならば、共同性を強調するほどに、討伐隊、もしくは先の西北青年会が共同性を破壊する者として描かれるのは必然になる。

では、このように、文京洙が肯定的に描く済州島コミュニティの共同性や独自性は、済州島に生まれ居住する者はどう理解しているのだろうか。文京洙自身が以下のように述べている。

済州大学のある研究会で（略）四・三事件についての私の考え方を述べたとき、まさにこの済州社会の特殊性が論点となった。私は、解放直後に済州島民が示した自治の志向を重んじて、（略）そういう自治への志向の根拠の一つとして済州の共同体の独自性に触れた。反応は散々であった。済州社会の特殊性といっても、他の地域にあるような地方的な個性以上のものではないとか、単なる近代化の遅れにすぎない、というのが大方の見方だった。最近になって気づいたことであるが、済州島に現に住む人びとは済州の独自性を云々することを嫌う。これにこだわるのは、私のようなヨソモノが多いようだ〔文京洙 2007: 267〕

つまり、済州島の共同性とは誰もが納得し理解できるものではなく、一般化できるものではない。文京洙がいう済州島の共同性とは文京洙の想像であり創造である。しかも、「ヨソモノ」として実体験がないがゆえの、その場にいらないからこそ再構成できた想像と創造の産物でもある。後述するが、このような「ヨソモノ」の自覚が「故郷」を保有する欲望へと至り、記憶と物語の再構成と継承へと至らずと考えられるのである。

あらためて述べれば、済州島の共同性が幾度ともなく強調されていたのはたしかであり、したがって、済州島の共同性は済州島を語る必須条件として読者の記憶に位置づいていくのである。

6. 「四・三運動」、ナショナルヒストリーとしての「4・3」

韓国では1987年の6月抗争¹¹⁾に際し、済州島でも学生を中心とした同調するデモがおきたという。このデモは「済州島民の抵抗精神を蘇らせるきっかけとなった」ともいう〔文京洙 2008: 171〕。

他方、6月抗争以前より民族サークルや秘密の4・3追悼会などがあり、それら済州島での独自な社会運動が済州島の抵抗精神をよみがえらせる萌芽だったともしている〔文京洙 2008: 172-175〕。

以降、6月抗争が切り開いた民主的な社会空間を前提に「四・三運動」がみられるようになったと文京洙は指摘する。「四・三運動」とは、四・三事件の真相究明と名誉回復を中心に保障や歴史的な位置づけ、責任の追求、遺骸や遺跡の発掘、あるいはこれらの措置を法的に担保する制度づくりなどを包含する言い方である〔文京洙 2008: 182〕。

この「四・三運動」以降、「共産暴動」という公認された見方のみが強要された「4・3」の再評価がすすんだという〔文京洙 2001: 182-204〕。つまり、「四・三運動」と韓国の民主化の進展を連関して描いており、そのうえで、「4・3」の評価が「受難と和解」の視点へと変化したとしている。

したがって、「4・3」の評価と韓国の民主化を表裏一体の関係として描いているのが理解で

きる。韓国の歴史として民主化を描き、そのなかに「四・三運動」を連関させることで、「4・3」そのものが韓国の歴史と化しているのである。いわば、「4・3」は、韓国の民主化達成までの不幸なエピソードであり、民主化以降は民主化を誇るエピソードに変容したといえよう。

文京洙は、「四・三運動」として、「劇団スヌリム」の「文化宣言」を紹介している。「済州島が立ち後れ、打ち捨てられた土地であればこそ、むしろそこに民族の伝統がよく保たれ、外来文化に抗う前衛の位置に立てる、というわけである」とした解説を加え、「済州島固有の伝統、生活・労働の様式・リズムの再発見、さらにこれを土台とする済州島人の主体性の回復・自立の方向が模索されているのである」[文京洙 2008: 174]とも付け加えている。

「民族の伝統がよく保たれ」とは済州島の独自性を強調するために選ばれたエピソードであり、その解説では「打ち捨てられた土地であればこそ、むしろそこに民族の伝統がよく保たれ」とある。

では、済州島は、どこから、だれから「打ち捨てられた土地」であろうか。済州島、済州島民以外であり、すなわち、本土の韓国国家、韓国人である。つまり、済州島、済州島民が韓国国家、韓国人の一部であり、済州島の独自性、共同性を強調しつつも、それらを包含する韓国国家をけっして否定していない。

幾度となく強調された済州島の独自性と済州島を「打ち捨てられた土地」とするエピソードは、済州島を韓国国家の内部として逆説的に認知させることであり、済州島の独自性は韓国国家の包摂と多様性を示すものへと転化しているのである。

つまり、韓国の民主化によって、「4・3」と「四・

三運動」は国家の「物語」に転化した。それと同様に、幾度となく強調された済州島の共同性、独自性もが国家の「物語」に絡みとられ、結果、それらは、韓国国家の民主性と多様性を示す「物語」へと転化したと考えられるのである。

7. 「公共圏」という「故郷」の排除性

以上、文京洙を中心として再構成された「4・3」の「物語」をみてきたが、その特徴は以下の3点に要約できる。

1. 済州島の共同性と独自性の強調
2. 済州島の排除性の隠蔽
3. 韓国国家の多様性の表象

これらの「物語」を在日朝鮮人が継承する意味を考察していくが、まずは頻出した済州島の共同性と独自性、そして隠蔽された排除性である。先述のとおり、文京洙は共同性を明確に定義していない。済州島の人民委員会の政策が「昔ながらの村社会の共同性に深く根ざす存在であった」[文京洙 2008: 72]としているのをみれば、それを済州島の本質的傾向にとらえているのは明らかであろう。

また、その著作『済州島現代史 公共圏の死滅と再生』において、文京洙は「公共圏」という枠組みから済州島を論じているが、「死滅と再生」ともあるように、その論じる「公共圏」には、「4・3」によって破壊された故郷と、その共同性が民主化以降に再生されたとするニュアンスが含まれているように思われる。つまり、その「公共圏」には済州島の共同性の隠喩、さらには、「故郷」の意もが含まれていると考えられる。

さておき、ここで文京洙がいう「公共圏」とは、「日常の生活世界に根ざす、公共のことがらをめぐる自由で開かれた〈議論の場〉」ということ

あり、そこでの自由な討議から生まれる意思や行為が、「権力システム」や「経済システム」を制約し理性化するであろうという発想」である〔文京洙 2005: 8〕。

また、「討議や対話の場であると同時に、不満、欲求、希望そして共感といった生活世界に発する様々なインパルス（衝動）を経済（市場）と政治（国家）の二つのシステムに中継ぎする場でもある」ともいう〔文京洙 2005: 12〕。

さらには、「空間的には、国際社会、地域、国家、地方、二次文化など、大小の、そしてコミュニケーションの密度や影響力も多様な、互いに重なりあう複数のアリーナからなっている。つまり、それは、居酒屋、コーヒーハウス、道端でのごく一時的な公共圏から、芝居の上演、PTA、ロック・コンサート、政党の集会、教会の大会など、催事としての公共圏を経て、地球全体に散在する読者・視聴者からなりマスメディアによって作り出される、抽象的な公共圏にまでいたる」というものである〔文京洙 2005: 12〕。

文京洙は「公共圏」を議論の場だとしている。一時的なものから催事、抽象的なものまでを指摘し、討議によって「権力システム」や「経済システム」を制約し理性化するともいう。

だが、ここで文京洙は議論の前提になるものを何も語っていない。討議や対話の場でコミュニケーションを成立させるに必要なのは言語の一致である。

政党の集会、PTA、教会の大会などの例をみれば、それは思想や信仰、利害などがとりあえずは一致する者の場であり、それによって討議が成立する。だが、これらの討議は言語の一致が前提であり、それがない限り「公共圏」は創出できず、参加も不可能になる。

したがって、「公共圏」への参加には言語の一

致という暗黙裏の条件があり、裏を返せば、言語が一致できない者への排除が隠蔽されている。共同性が排除性を隠蔽するように、「公共圏」は排除性を隠蔽している。

にもかかわらず、済州島の共同性を「公共圏」におきかえることは、それに参画できるメンバーを無自覚に画定することである。「公共圏」の参加には言語の一致が必要であり、逆にいえば、言語が一致できない者は排除される。したがって、韓国語を解さない在日朝鮮人は済州島という「公共圏」に参加できないことを文京洙は述べていることになる。

先述のとおり、「公共圏」は済州島の共同性と読みかえ可能であったが、あわせて、「故郷」の共同性を実感覚でとらえるには、済州島の生活世界に身をおく必要がある。文京洙があげた上記の例にあわせてみても、「公共圏」は生活世界とかけ離れてはいない。

以上をふまえれば、日本語しか解さず、済州島の生活世界からも離れた在日朝鮮人は、いかにそのルーツが朝鮮半島、済州島にあらうとも、済州島という「公共圏」から排除されるのは明らかである。そして、一方では、その排除性が隠蔽されているのもたしかなのである。

8. 集合的記憶への参入と故郷を保有する欲望

ついで、韓国国家の多様性の「物語」について考えたい。幾度も述べたように、在日朝鮮人は韓国語を解さない者が多い。相互に共通する言語を用いることでコミュニケーションは成立するが、日本語しか解さない在日朝鮮人と韓国語しか解さない済州島民とでは言語を介したコミュニケーションの成立には困難がある。

また、「公共圏」への参加のみならず、記憶の

継承、「物語」の創造に言語が欠かせないことを考えると、それが一致できない在日朝鮮人は記憶の継承からも排除されることになる。

在日朝鮮人が言語の問題から済州島という「公共圏」から排除される一方、朝鮮半島、済州島にルーツがあることをふまえれば、済州島をみずからに連なる「故郷」と考えることは決して不思議ではない。だが、言語の問題によって排除された「故郷」をみずからのものととらえ、その一員となるには別の方策が必要となる。そこに用いられるのは集合的記憶の保有である。

アルヴァックスによれば、記憶には個人的記憶と集合的記憶があり、人はその2種類の記憶に参加するという。そして、人はあるときには個人的ではない思い出を、その集団に関係を持つ限りにおいて喚起し、維持することに寄与するような集団の成員として振る舞うことができるという [Halbwachs, 1950=1998: 45-46]。

アルヴァックスの指摘にしたがえば、集団に関係を持つ限りで集団の記憶を喚起し、維持することで集団の成員となれる。これを「4・3」の記憶の継承にあわせて考えると、在日朝鮮人は「4・3」の記憶と物語を継承することで、済州島という「故郷」の一員の位置を獲得できることになる。

しかし、このアルヴァックスの指摘においても言語の問題にはふれられていない。集合的記憶の保有の前提となるのは言語の共有である。「公共圏」はコミュニケーションをともない、しかも、生活世界に密着している。それに対し、集合的記憶は翻訳の過程を経た記憶を受容することで自分のものにすることができ、生活世界から離れていても可能である。つまり、翻訳の過程を経ることで在日朝鮮人は集合的記憶を有し、済州島という「故郷」を保有し、その一員

となることができる。換言すれば、「ヨソモノ」である在日朝鮮人が「4・3」という「故郷」の集合的記憶を継承する行為は、「故郷」を保有し、その一員となる欲望でもある。

しかし一方では、翻訳の過程を経たうえでの異なる言語間の記憶と物語の共有は、厄介な問題を孕んでいる。なぜならば、同一の物語の共有であったとしても、翻訳の過程で翻訳者の解釈がはさまれ、なんらかの変容が生じかねないのである。

翻訳によりあらわれた記憶と物語とは、記憶を翻訳し、再構成する者の解釈でもある。先にみたとおり、幾度も強調された済州島の共同性と韓国国家の多様性は、解釈する者、しかも「ヨソモノ」の想像であり創造であった。

しかしながら、言語が一致できない在日朝鮮人が済州島という「故郷」を有し、その成員として振る舞い、その記憶を自分のものにする—集合的記憶への参入—には、翻訳による想像／創造に頼らざるをえない。翻訳の過程を経て再構成された物語を受容し、みずからに連なる記憶や物語として継承することで、韓国語を解さない在日朝鮮人は済州島という「故郷」の一員として振る舞うことが可能になる。

一方、翻訳の過程で「4・3」の物語は韓国国家の多様性に包含され、ナショナルヒストリーとも化していた。ならば、在日朝鮮人がこのような「4・3」の物語をみずからの記憶や物語として受容し、継承することは、韓国国家の多様性を受容することでもある。

つまり、翻訳の過程を経た「4・3」を在日朝鮮人が継承するのは、韓国国家の多様性をもみずからに連なるものとして受容することでもあり、これは済州島という「故郷」の一員になるだけでなく、韓国「国民」の位置づけを獲得す

る行為でもある。

このようにして獲得した在日朝鮮人の「故郷」や「国家」のメンバーシップは、「公共圏」や共同性がそうであったように、一方では排除性が隠蔽されている。しかし、その排除性は在日朝鮮人が「故郷」や「国家」を保有する欲望が満たされることで無視、もしくは忘却される。換言すれば、「ヨソモノ」が「故郷」を保有する欲望を満たすことこそが、「物語」継承の動機となるのである。

9. おわりに

以上、文京洙のテキストを読み解くことで、在日朝鮮人によって再構成され、継承される「4・3」がナショナルヒストリーであったこと、そして、在日朝鮮人がこのような「物語」を継承する意味とは、みずからの「故郷」や「国家」を保有したい欲望のあらわれだとも考察してきた。

ナショナルヒストリーは強力であり、流通しやすく、かつ、浸透しやすい。しかし、他方では、ナショナルヒストリーとはならなかった周縁の多数の小さな物語が存在するのもしかである。「4・3」がナショナルヒストリーへと編入されるまでには、継承されなかった「4・3」の小さな物語、たとえば、犠牲者を弔う儀礼や残された者たちの苦難などの生活世界に密着したものが幾多も存在したのは明らかであろう。

ならば、記憶がナショナルヒストリーとなるまでに幾多ある記憶から何が選択され、何が選択されなかったのか。また、記憶が選択され、もしくは選択されなかった理由が何にあるのか。選択の過程には何らかの摩擦や葛藤、衝突がみられたのか。これら記憶の選択に至るまでに生じた摩擦と葛藤や衝突などを、ナショナルヒストリーに編入されることのない人びとの記憶と

物語として、ローカルにおいていねいに語り継ぐ作業が必要だと思える。

ナショナルヒストリーとしての「4・3」をけっして否定するのではなく、それがあると同時に、一方ではローカルヒストリーとしての「4・3」があり、さらには諸個人の「4・3」があつてよいはずである。ひとつの物語にとらわれる必要はけっしてなく、多様な記憶と物語を意識して語り継ぐことで「4・3」の諸相があらわれ、人びとの記憶と物語化をめぐる葛藤もあらわれると思われる。このようなさまざまな記憶と物語を継承することこそ、「ディアスポラ」たる在日朝鮮人が行うべきものではなからか。

「ディアスポラ」とは、野口の指摘をふまえれば「一つの中心だけをもつのではなく、二つの（あるいは二つ以上の）中心をもった存在」〔野口2009: 187-188〕である。在日朝鮮人は日本と朝鮮半島上の国家の狭間に生きており、多様なアイデンティティ、つまりは複数の「中心」を保有するといえることから「ディアスポラ」といえる存在である。

在日朝鮮人がナショナルヒストリーを継承し、韓国国民の位置を獲得することもけっして否定すべきではない。しかし、それ以上に、国家の周縁にある小さな物語をいくつも継承し、ひとつのものだけに収斂されるのではない、複数の中心を保有することこそ在日朝鮮人に必要な作業だと思える。このような複数の中心を保有する行為を通じて国家間の狭間に生きる自集団をあらためてみつめ直し、そのうえで国家への相対的視点を獲得すべきだと筆者は考える。

以上、本論がみてきたのは、「済州島」というより大きな「故郷」での集合的記憶とそれへの参入である。しかしながら、他方で周縁の小さな物語の継承を考えるには、より生活世界に密

着した「村」などの単位から「故郷」をとらえ直す必要がある。

「村」といったより小さな単位の「故郷」では、「4・3」犠牲者の追悼や残された者たちの困難など、「4・3」はいかに生活世界に密着して「物語」化され継承されているのか。また、「村」が共同性を有するとすれば、同時に排除性を有するものも明らかである。このような場が有する記憶に、その場にいなかった在日朝鮮人ははたして参入できるのであろうか。本論から派生する今後の課題であり、機会があればあらためて考察したい。

* 大阪市立大学人権問題研究センター特別研究員

【注】

- 1) 済州島の総面積1848.3km²は日本の香川県にほぼ等しく、2011年2月現在、約56万人の人口を有する。
- 2) 2012年に行われた大阪市立大学人権問題研究センターの済州島現地学習に筆者は参加し、済州4・3平和祈念館を訪れた。見学の際、祈念館ガイドより日本語にて、「済州島四・三事件は一般的に「事件」といわれているが、「事件」なのか「蜂起」「闘争」なのかの評価はいまだ議論が続いており、ここでは単に「4・3」とよんでいる」旨の説明を受けた。本論ではこれにならい、ことを「事件」とするか「闘争」とするかの判断はせず、また、それが本論の目的でないことから、単に「4・3」と記述する。
- 3) ただし、その「事実」の根拠となる資料等は同書上で明示されていない。
- 4) 「在日朝鮮人」とは、日本の旧植民地である朝鮮出身者およびその子孫であり、いわゆる「オールドカマー（「オールドタイマー」）」の人びとであるが、本論では「4・3」というできごとにフォーカスしていることから、主に済州島出身者と済州島にルーツを持つ者としてあつていている。
- 5) 本論の初稿時に参照した『朝鮮を知る事典』は本文中のとおり2000年改訂発行されたものだが、2014年3月に新版が発行されている。2014年新版と2000年改訂発

行版とも内海愛子が「4・3」を記述しており、韓国での真相究明や特別法の制定、大統領の公式謝罪のみならず日本での動きにもふれ、大きく加筆されている【伊藤、大村ほか 2014: 325-326】。

- 6) 近年では、「4・3」を実際に済州島で体験し、日本に逃れてきた金時鐘が、金石範との対談『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』において、日本への渡航から半世紀以上経て、はじめて「4・3」の経験を語っている。その経験談は、筆者の読解では、「4・3」の渦中にいたがゆえの、いささか自戒的な感がある。なお、金時鐘の経験は『図書』誌上での連載後、『朝鮮と日本に生きる一済州島から猪飼野へ』（2015年、岩波書店）として出版されている。
- 7) たとえば、本文中の『朝鮮を知る事典』では、「済州島は高麗朝以来本土からの政治的・文化的影響を強く受け、朝鮮の地方文化の一つとしてとらえることができるが、神話モチーフや独特な隠居制をはじめ精神的・物質的文化のあらゆる面にわたり、本土とは異質の古い南方的・海洋的な独自の基層的民俗文化を多く保存している」【伊藤、大村ほか 2000: 154】とある。
- 8) 朝鮮半島では日本の植民地支配からの解放後もなく、呂運亨らによる「朝鮮人民共和国」樹立宣言が行われたが米軍政によって否認され、38度線以北のソ連、以南はアメリカにより分割占領がなされた。その後、1945年12月の米英ソ三国外相会議により、朝鮮人自身による統一的臨時政府樹立と米英中ソによる5年間の後見がきまったが、この信託統治案には朝鮮半島内で賛否をめぐり激しい対立と混乱があったとされる【文京洙 2008: 57】
- 9) 朝鮮建国準備委員会は呂運亨と安在鴻によって解放後もなく結成された。地方組織の発足を訴え、各地で続々と建準もしくは人民委員会を名乗る自治組織が結成され、8月31日までに全国に145の建準支部があったとされる。建準の支部は、1945年9月6日、中央での朝鮮人民共和国の樹立が宣言されたのち、人民委員会の名称と呼ばれるようになった【文京洙 2008: 61】。
- 10) 「4・3」当初、武装隊の民間人への攻撃は警察、右翼の家族、協力者などに限られていた。しかし、月日が経つにつれ、武装隊に非協力的で討伐隊側についているとみなされた一部の村に無差別攻撃が加えられ、多くの犠牲者が出たという【文京洙 2008: 138】。
- 11) 1980年代半ば、韓国での大統領直選制改憲を軸に民主化を求める学生、野党、宗教界などを含む野団体など

の民主勢力と、現状維持をはかろうとする軍部政権との攻防があった。1987年6月、学生をはじめとしたあらゆる分野と階層の市民が街頭デモを行った結果、6月29日、軍部政権が民主勢力の直選制改憲などの要求を盛り込んだ「6・29民主化宣言」に至ったとする抗争である〔文京洙 2008: 169-170〕。

マイノリティ』、明石書店、185-203

- ・杉原達、1998、『越境する民 近代大阪の朝鮮人史研究』、新幹社
- ・和田春樹・石坂浩一編、2002、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、岩波書店

【参考文献】

- ・Halbwachs, Maurice, 1950, "La memoire collective" (＝小関藤一郎訳、1989、『集合的憶』、行路社)
- ・伊藤亜人・大村益夫ほか監修、2000、『新訂増補 朝鮮を知る辞典』、平凡社
- ・同、2014、『新版 韓国 朝鮮を知る事典』、平凡社
- ・国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編、2010、『在日コリアン辞典』、明石書店
- ・金石範、2010、『金石範《火山島》小説世界を語る！ 済州島四・三事件／在日と日本人／政治と文学をめぐる物語』、右文書院
- ・金石範・金時鐘、2001、『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか 済州島4・3事件の記憶と文学』、平凡社
- ・文京洙、2001、『「4・3事件を考える－事件の経緯とその意味」』、金石範・金時鐘、『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか 済州島4・3事件の記憶と文学』、平凡社、203-230
- ・同、2005、『済州島現代史 公共圏の死滅と再生』、新幹社
- ・同、2007、『在日朝鮮人問題の起源』、クレイン
- ・同、2008、『済州島四・三事件－「島（タムナ）のくに」の死と再生の物語』、平凡社
- ・文京洙、2010a、『済州島四・三事件とはどんな事件か』、済州島四・三事件を考える会・東京編、『済州島四・三事件 記憶と真実 資料集 済州島四・三事件60年を越えて』、新幹社、6-8
- ・同、2010b、『沈黙の壁を越えて－四・三事件をめぐる日本での取り組みをふりかえる』、済州島四・三事件を考える会・東京編、『済州島四・三事件 記憶と真実 資料集 済州島四・三事件60年を越えて』、新幹社、63-67
- ・永野慎一郎、『済州島社会経済発展への在日済州人の貢献』、永野慎一郎編、2010、『韓国の経済発展と在日韓国企業人の役割』、193-208、岩波書店
- ・野口道彦、2009、『ディアスポラと部落、そしてパラダイムの変換』、大阪市立大学人権問題研究センター企画、野口道彦・戴エイカ・島和博著、『批判的ディアスポラ論と